

## 認知機能低下のある患者に個別性でゆとりを求めた関わりの工夫 ～病棟デイケアを試みて～

施設名：江藤病院

発表者：打樋 聡美 (看護師)

共同演者：大和 孝子 (看護師) 田中 幸子 (医師) 由宇 教浩 (医師)

### 【はじめに】

当院の入院患者の約半数に認知機能低下があり、他疾患合併や環境変化など様々な要因で行動・心理症状へ進展し、在宅支援が困難になることも少なくない。高山らは、入院生活では認知症の人の個別性に合わせた対応が後回しにされる為、認知症症状が急速に悪化してしまう<sup>1)</sup>と示しており、個別性に合わせたゆとりのある対応が早急に必要であるのではないかと考えられる。

入院中に、体操や興味関心のある活動ができる環境(病棟デイケア)を整え、残存機能に合わせた関わりを実施することで、生活リズムが整えられ、その人らしさの生活の継続となり、認知機能維持または改善に繋がるのではないかと考え、認知機能の変化を評価したので報告する。

### 【方法】

1) 期間：2020年10月21日～同年12月24日

2) 対象者：認知症もしくは認知機能低下、1時間座位保持可能な患者。

3) 内容：週1回、40分間。体操・興味関心のある作業もしくは認知症の程度に合わせながらの作業

3. 評価

入院・退院時①出席回数②NMスケール③在宅復帰

### 【結果】

対象者総数17名、平均出席回数2.6回。35%の参加者(平均出席回数3.3回)がNMスケールのアップがみられた。内訳として、家事身辺・関心意欲交流・会話数の増加がみられた。アップがみられなかった群の平均出席回数は2.3回。全参加者の94%は在宅に復帰した。

### 【考察】

入院中に体操や興味関心のある活動ができる環境を整え実施したことで、生活の中への楽しさへと繋がり、認知機能維持に至ったと思われる。金森は「楽しい活動は自己効力感を上昇させ、認知症者が自身の役割、人生の目的を再確認するものとして期待される。」<sup>2)</sup>と示している。入院中にその人の個別性の重視、また認知症の程度に合わせた関わりやゆとりのある時間を過ごせられるよう調整することで、自身の存在意義を確認でき、穏やかに過ごすことに繋がり、認知機能維持に少なからず有効だったと考えられる。

### 【今後の課題】

入院早期から介入し参加できる体制づくり、多職種での支援、生活の中で離床や興味関心事が実施できる環境調整を継続し、慢性期病院における認知症看護の充実に繋げたい。

7. 引用参考文献

1) 高山成子：認知症の人の生活行動を支える看護。医歯薬出版株式会社,2016

2) 金森雅夫：認知症plus予防教育。日本看護協会出版会,2020